

第5章 高等学校の研究

第1節 研究の構想

1 研究主題

「在り方生き方にかかわる資質・能力を育成する進路指導」

- 体験的学習を中心として -

2 主題設定の理由

高校生の中途退学の増加傾向は、学校を中心に様々な努力がなされているにもかかわらず、依然として続いています。その諸相には、大きな教育課題である不登校やいじめの問題の増加や器物破損・暴力などの問題行動が根強いこと、さらには生徒全体に無気力・無関心・無感動といった今日的な傾向が潜在していることなどがあります。こうした課題の解決に向け、進路指導における在り方生き方の指導や、「生きる力」の育成がますます重要な視点となってきました。

現行の高等学校学習指導要領においては、進路指導の目標として「生徒が自らの在り方生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行うこと」（第1章総則）と記述されています。これは、進路指導を「在り方生き方指導」の中に位置付け、一人一人の生徒に自らの在り方生き方を考えさせ、主体的に進路選択をする能力を育てること示しています。

さらに、特別活動の目標として「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。」と記述されています。これは、特別活動が、なすことによって学ぶことを基本として、そのねらいを達成しようとすることを示しています。すなわち、多くの体験的な活動を展開し、一人一人の豊かな個性を育成するとともに、正しい勤労観や職業観を育成し、奉仕の精神を涵養していくことが、人間としての在り方生き方の自覚を深めることにつながるということです。

一方、第15期中教審第一次答申で示された「生きる力」としての資質・能力の育成は、当然教科・領域等すべての教育活動を通して、総合的に行われるべきものです。また「生きる力」は、生涯にわたって生き抜くための基礎的・基本的で実践的な資質・能力を明示したものととらえることができます。したがって、この「生きる力」を育てることは、自らの在り方生き方の認識を深めさせ、生徒一人一人に主体的に適切な進路を選択する能力を育てることにもつながるものと言えます。

主体的な進路選択の能力として、生徒自らが常に自分の生き方を問いながら、その中で進路目標を設定することや、多くの進路情報の中から自らに必要なものを適切に選択し活用することは、「生きる力」における「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」、いわゆる問題解決の能力に連動するものと言えます。この資質・能力を育成するためには、まず意欲や向上心にあふれた主体的な態度を育てることであり、それらの過程を通して自信や自負心と責任感を育成することです。

また、「自らを律しつつ、他人とも協調し、他人を思いやる心や感動する心など」として示される「豊かな人間性」の育成の機会と場としては、ホームルーム活動を中心とした、生徒が

主体的な活動を展開するホームルームがあります。自己認識を深めるとともに、他者理解を図り、社会性を身につける学習の場としてのホームルームづくりは、生徒の主体的な進路選択能力の基盤となる「生きる力」の育成に大きな役割を果たします。

さらに、教育課程審議会の「中間まとめ」においては、例えば、ホームルーム活動にかかわって、「中学校、高等学校における学級活動、ホームルーム活動については、集団としての自覚を深め、人間としての在り方生き方の指導の一層の充実を図る視点から、生徒の主体的な活動を生かすよう、体験的・実践的な活動を通して指導できるようにする」と提起され、学校行事においても「自然体験、異年齢集団の活動や高齢者とのふれあい、ボランティア活動等体験的活動を重視するようにする」と提起されています。

中学校における進路学習にかかわる体験的な活動については、職場体験実習、社会人講師の講話、多様なボランティア活動など、さまざまな取組がなされています。このような中学校での、体験的な進路学習として企画・実施されている啓発的な体験活動を、高校における進路指導においてどのように引き継ぎ、適切に展開しようとしてきたかという点では、必ずしも十分ではなく、今後の課題であると考えられます。

また一方、高等学校においても、人間としての在り方生き方に関する指導を充実するという視点から、各教科・特別活動において体験的活動を取り入れた学習の在り方について考えることが大変重要になってきています。

体験的な学習を各学年の中心に据え、生徒の発達に応じて、系統的・継続的に計画・実施することにより、生徒は自己の進路に対する認識を深め、自らの在り方を自覚するとともに、将来の生活や生き方を熟考し、積極的に生きることを目指すこととなります。

以上のような視点に立ち、研究主題を「在り方生き方にかかわる資質・能力を育成する進路指導 - 体験的学習を中心として - 」と設定しました。進路指導における体験的学習の在り方について研究を進めることで、豊かな心を基盤とした生きる力の育成に迫ることにしました。

3 研究の仮説

今後の学校教育においては、生涯にわたって学習し続ける意欲や変化の激しい社会においても柔軟に生き抜くための資質・能力、すなわち「生きる力」を主体的に身に付けさせることが大切であり、そのためには多様な体験の機会と場を有効に活用した学習を企画することです。

一般に、体験とは身体（五感）を通して得られる直接的な経験のことを意味し、直接経験を内容とする活動を体験的活動と呼びます。そして、体験的活動を通して、あるいは基盤として行われる学習を体験的な学習と呼びます。

「なすことによって学ぶ」ことを基本とする体験的な学習では、「なすこと」（行動、身体的活動）と「考えること」（思考、知的活動）とが一体となって働くことが基本となります。

そこで、本研究では、次のような仮説を設定しました。

生徒は多様な体験的活動の機会や場を通して、人間としての在り方生き方にかかわるさまざまな資質・能力を身に付けることができる。また、体験的な学習を中心とした進路指導を展開することを通して、一人一人に生きる力をはぐくむことができる。

4 研究の内容と年次計画

(1) 内容

体験的な学習を中心とした、人間としての在り方生き方にかかわる資質・能力を育成する進路指導を通して、生きる力をはぐくむ実践の在り方を探求します。

(2) 年次計画

ア 1年次

「豊かな心を基盤とした生きる力の育成」にかかわるアンケート調査の分析を踏まえ、府内の高等学校における進路指導の状況や生徒の進路に関する意識をまとめ、実践の方向を明らかにします。

また、基本的な理論研究を深め、進路指導における体験的な学習の在り方について提起します。

イ 2年次

1年次の研究の成果を踏まえ、研究協力員等を委嘱して協力を求め、進路指導における体験的な学習の在り方について研究を深め、生きる力をはぐくむためのより具体的な方途を提起します。

第2節 高等学校における進路指導

1 高等学校の現状と課題

「人は、専門性を身に付け、職業を持つことによって、自らの個性を発揮し、誇りを持ち、自己実現を達成するとともに、社会と関わり、社会的な責任を果たすことができる」（理科教育及び産業教育審議会答申）といわれています。

近年、科学技術の進歩、国際化、高度情報化、少子高齢化等、我が国の社会は大きく変化してきています。また、中学校の卒業者の高等学校進学率は、97%に近づき、それに伴い高等学校入学の動機も多様化してきています。

文部省「平成6年度 学校教育と卒業後の進路に関する調査報告書」によれば、普通科における入学動機は、「大学へ進学するため」と「中学校の成績だとこの高校が適当だったから」が大半を占め、職業学科においては、「将来の仕事に役に立つ知識や技術を身に付けるため」と「中学校の成績だとこの高校が適当だったから」が上位を占めています。注目したいのは、両学科に共通する「中学校の成績だとこの高校が適当だったから」という動機です。生徒自身が明確な目的や希望を持って高等学校を選択する「行きたい高校」選びへと、中学校の進路指導が改善されつつある中で、いまだに「入れる高校」選びが存在し、そうした生徒がかなりの割合で入学してきているというのが現状です。

また、公・私立高等学校の中途退学者の割合は、近年微増してきており、文部省調査によると、平成8年度全国で2.5%（111,989人）、平成9年度には2.6%（111,491人）であり、昭和57(1982)年の調査開始以来最高の比率を示しています。(図1)京都府においても、平成8年度公立高等学校全日制で1.2%（655人）、平成9年度には1.3%（654人）と、人数は変わらないも

のの在籍に対する割合は増えてきています。その中途退学の理由（全国）をみると、就職や別の高等学校への「進路変更」（40.8%）と「学校生活・学業不適應」（33.4%）が、その大半を占めています。

平成10年12月31日付のある新聞の社説には、「高校中退の増加については、従来から二つの問題点が指摘されている。一つは中学校の進路指導に問題はないか、もう一つは高校のあり方が柔軟性を欠いていないか、という二点だ。」と述べられています。

ここで、高等学校としては、「入れる高校」選びが中途退学の主因だとして、中学校の進路指導を批判するだけで事をすますわけにはいきません。高等学校教育関係者がこの中途退学の問題に正面から取り組むときの大きな課題としては、従来の高等学校教育に何の魅力も感じなかったり、自分のやりたいことが見つからない、あるいは不本意入学感が拭いきれないなどの理由で学校生活に適應できず、学業不振に陥り、中途退学せざるを得ない生徒をどうするか、ということです。

この課題の解消には、前述の社説の指摘のとおり、生徒一人一人の能力や個性を發揮できる柔軟な教育システムの構築はもちろんのこと、魅力ある授業・分かる授業の創造や、教師が一方的に「知識を教え込む教育」から、生徒が「自ら学び、自ら考える教育」への転換が必要となってきました。

こうした状況と課題を踏まえ、これからの高等学校教育においては、目的意識のない生徒、不本意入学感を払拭できない生徒、自己の置かれた現状を理解しない生徒など、ますます多様化する生徒に対して、自らの興味・関心、能力・適性等に基づき、目的と意欲をもって何事にも主体的に取り組む姿勢を育成する教育、とりわけ変化の激しい時代にあって、一人の人間として、社会人として、よりよく生きていくための資質や能力を育成するための進路指導について、検討していく必要があると考えます。

2 特別活動（ホームルーム活動）における進路指導の取組の現状

(1) LHR（ロングホームルーム）年間計画に見る進路指導について

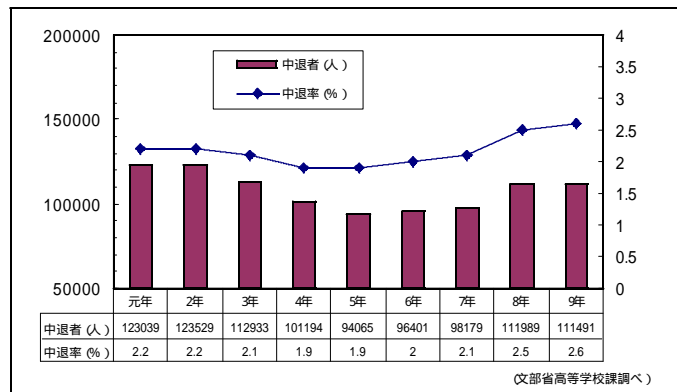
進路指導における、将来の進路や職業の選択決定に関する能力や態度の育成は、従来から進路学習として、主にホームルーム活動を中心として計画・実施されてきました。また、進路指導の取組については、現行の学習指導要領において次のように示されています。

普通科においては、地域や学校の実態、生徒の特性、進路等を考慮し、必要に応じて、適切な職業に関する各教科・科目の履修の機会の確保についても配慮するものとする。

【教育課程編成に当たって配慮すべき事項（総則・第5款の2）】

生徒が自らの在り方生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行うこと。

図1 全国公・私立高等学校における中途退学者数等の状況



【指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項（総則・第6款6の(4)）】

ホームルーム活動に配当する授業時数の3分の2程度は内容の(2)『教育相談・進路相談』及び(3)『在り方生き方』に配当すること。

【指導計画の作成と内容の取扱い（第3章特別活動第3の1の(4)）】

このように、将来の生き方や進路の適切な選択に関する指導については、計画的、組織的に取り組むよう教育課程に位置付けられています。また、高等学校進路指導資料の中では、啓発的経験の指導の重要性についても強調されており、そのねらいとして、以下の5点が示されています。

- 自己の特性、進路等についての理解を深める。
- 産業・職業の動向について理解を深める。
- 自己の将来の職業や進路に対する関心と理解を深める。
- 望ましい勤労観や職業観を育成する。
- 職業生活、社会生活に必要な知識・技術を習得させると共に創造的な能力や態度を育成する。

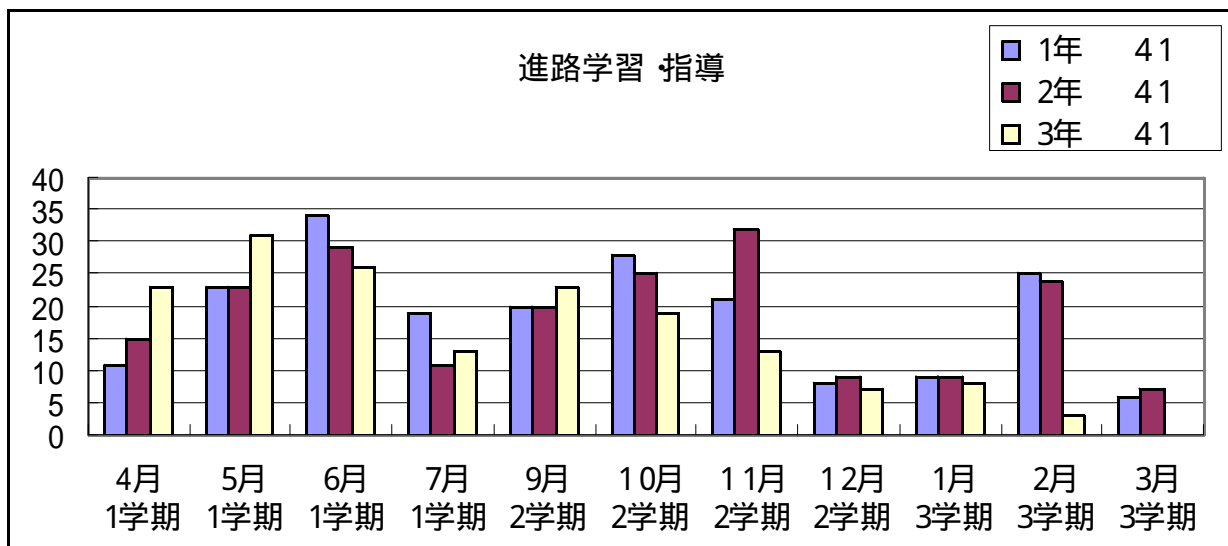
ここで、啓発的経験の指導のねらいは、経験を得させることにあるのではなく、生徒の自己理解や進路情報の理解に現実性や具体性をもたせることにより、より適切な進路の選択決定に役立てることにあります。

(2) 府立高等学校（全日制）「LHR年間指導計画」に見られる進路指導の状況について

平成10年度第2回府立学校生徒指導部長会議において、情報交換用として提出された各校の資料を基に、「LHR年間指導計画」に見られる進路指導の状況を見てみました。

ア 学年別月毎の計画状況

グラフ



進路学習については、年間を通して継続的に実施計画されています。しかし、7月、12月、1月、3月が他の月と比較して少ないのは、LHRの実施回数自体が少ないためと考えられます。

また、学年間の相違については大きな特徴はありませんが、5月は3年生が他の学年よりも多くなっています。これは進路別説明会の実施によるものと考えられます。

イ 学年別内容と項目について

学年別月毎の内容・項目については、次の表のとおりです。

(空欄は「共通したものがなかった」ということです)

	1 年		2 年		3 年	
	多い項目	進路学習 計画学校数	多い項目	進路学習 計画学校数	多い項目	進路学習 計画学校数
4月	進路希望調査	11	進路希望調査	15	進路希望調査	23
5月	進路適性検査	23	進路希望調査	23	進路別説明会	31
6月	カリキュラム登録説明	34	カリキュラム登録説明	29	進路別説明会	26
7月	カリキュラム登録説明	19	カリキュラム登録説明	11	書類・面接等指導	13
9月	カリキュラム登録	20	カリキュラム登録	20		23
10月	カリキュラム登録	28	進路別進路学習	25		19
11月		21	進路別進路学習	32		13
12月		8		9		7
1月		9	進路希望調査	9		8
2月		25	進路別説明会	24		3
3月		6		7		
備考	教育実習の体験談(6月) 卒業生講話(9月) ボランティア(9月) 提言コンテスト(11月) 進路講演会(2月) 産業社会発表会(2月)		卒業生講話(5・6月) 担任講話(7月) 体験学習1.2.3(7月) 進路別見学会(10月) 卒業生講話(3月)		進路講演会(5月) 講話・討論(在り方生き方)(5・6・10・12月) 教育実習生の体験談(6月) 会社見学(7月) 体験学習(7月)	

実施計画内容、項目をまとめてみると、次のようになります。

(ア) 1年生 進路希望調査、進路適性検査(4, 5月)に始まり、カリキュラム登録説明及びカリキュラム登録(6~10月)を実施する点が各校の共通点といえます。社会人の講話・講

演会やボランティア等も少数ではありますが計画されています。

(イ) 2年生 1年生と同様に4月から9月にかけて進路希望調査、カリキュラム登録関係の内容を設定する学校が多いようです。2学期には進路別に分かれて進路学習を行い、1年生との差異を出しています。

(ウ) 3年生 進路別の説明会が4～6月、面接や書類等についての具体的な内容が7月から設定されています。各校の取組の共通性は1, 2年生と比較して少ないようです。

(I) 全体を通してボランティア、施設・会社見学等の体験的学習がやや少ないと思われます。また、LHR総時数のうち、進路関係のHR時数が少ないというのが現状です。

ウ まとめと考察

学習指導要領では「学校においては、地域や学校の実態に応じて、勤労や奉仕にかかわる体験的な学習の指導を適切に行うようにし、働くことや創造することの喜びを体得させ、望ましい勤労観、職業観の育成や奉仕の精神の涵養に資するものとする。」(総則・第1款の4)と述べられています。「啓発的な経験」の計画という観点では、社会人や卒業生等の講話・講演会、会社見学、体験学習、ボランティアなどが各校で実施されていますが、今後更に充実させていく必要があります。啓発的体験として考えられる主な内容としては、

- 1 進学に関する体験(見学、訪問、体験入学等)
- 2 職業や勤労に関する体験(企業・工場見学、職場体験学習、勤労・ボランティア体験学習、社会人の講演等)
- 3 自己の適性や特性の発見に関する体験(各種学校行事、美化活動、実習等)

などが考えられます。LHRの時間のみならず、学年や学校行事としてより組織的・計画的に取り組む必要のある内容のものも多く、今後一層各校の指導計画の工夫が必要となります。

3 進路指導の意義

(1) 進路指導の現状

今、高等学校の進路指導は、「生徒が自らの在り方生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行うこと」(「高等学校学習指導要領 総則」)と示されています。しかし、高等学校の進路指導は、徐々に学習指導要領の求めている方向へと変化してきているものの、最終学年における、就職先の紹介・斡旋や、いわゆる「入れる学校」選びの進学指導に偏りがちではないでしょうか。もちろんこうした卒業に向けた就職・進学指導は、生徒の進路先を決定するためのなくてはならない重要な指導です。しかし、こうした指導の前提には、あくまでも生徒の主体的な選択がなくてはなりません。すなわち就職する生徒が望ましい職業観・勤労観を持ち、進学志望の生徒が進学することの意義や目的を明確にもっていて、はじめて成り立つ指導です。

本来教育は、生徒の人間としての調和のとれた育成を目指して行わなければなりません。そ

のためには、生徒の多様な能力や個性をないがしろにした画一的な「出口指導」だけに終始した進路指導では、高等学校教育の本義にもとることにつながります。

(2) 進路指導とは

文部省「中学校・高等学校 進路指導の手引き - 高等学校ホームルーム担任編 - 」の中には、

進路指導は、生徒の一人ひとりが、自分の将来の生き方への関心を深め、自分の能力・適性等の発見と開発に努め、進路の世界への知見を広くかつ深いものとし、やがて自分の将来の展望を持ち、進路の選択・計画をし、卒業後の生活によりよく適応し社会的・職業的自己実現を達成していくことに必要な、生徒の自己指導力の伸長を目指す、教師の計画的、組織的、継続的な指導・援助の過程と言い換えることもできる。

と述べられています。

これを6点に分析すると、進路指導とは、

生徒が、 自分の将来の生き方への関心を深め、
自分の能力・適性等の発見と開発に努め、
進路の世界への知見を広くかつ深いものとし、
自分の将来の展望を持ち、進路の選択・計画をし、
社会的・職業的自己実現を達成していくことに必要な、生徒の自己指導力の伸長を目指す、

教師の、 計画的、組織的、継続的な指導・援助の過程

ということになります。

つまり、進路指導は、卒業時の就職の斡旋や「入れる学校」選びだけではなく、生徒に主体的な進路選択能力をはぐくみ、将来展望を持たせ、望ましい生き方を確立させるための、教師の指導・援助活動であるということが出来ます。

したがって、進路指導は卒業までの期間を見通した計画のもと、組織的、継続的に行われなくてはなりません。

(3) 進路指導の意義 - 個性の発見と伸長にかかわる進路指導 -

生徒を取り巻く環境の変化の速さには、急激なものがあり、こうした社会の変化に対応できる柔軟性と、生涯を通じて自ら学び続ける姿勢、すなわち自己教育力を身に付けることが、これからの社会に生きるすべての人に求められます。同時に、そうした資質の基礎を、これからの時代の担い手である生徒にはぐくむことは、学校教育の大きな課題です。

急激な社会の変化を進路選択にとっての多様な可能性の広がりにとらえ、その多様な選択肢の中から、自分の生き方の基準、価値観によって意志決定してこそ、人は充実した人生を送ることができます。

冒頭の理科教育及び産業教育審議会答申のとおり、人は「自らの個性を發揮し、誇りを持ち、自己実現を達成するとともに、社会と関わり、社会的な責任を果たすことができる」のであるがぎり、誰も個性的でありたいと願っています。個性を發揮し、社会から認められ尊重されることによって、生きていることの充実感を味わうことができるからです。

進路指導は、そうした生徒の個性の発見、言い換えれば生徒固有の生き方の可能性の発見とその伸長を通して行われなければなりません。

したがって、教師は様々な機会や場において、生徒自身に自己の特性を理解させ、それを自己の個性、すなわち将来生きていくための可能性として自覚させるよう指導・援助することが大切です。

(4) 進路指導の意義 - 「在り方生き方」にかかわる進路指導 -

高校生も例外なく、形はどうあれ、心の奥には自分を取り巻く社会とのかかわりを強く求めています。生きていることの実感を欲しているのです。人としての「在り方生き方」に対する関心は小さくありません。そうした生徒に、従来のように知識を一方向的に教え込むだけでは授業に何の興味も示さないばかりか、高等学校教育そのものに魅力を感じません。これからは、適切な課題を与え、あるいは自覚させ、生徒自らが考え、判断してその課題を解決する能力や資質を身に付けさせる教育の在り方が、必要になってきています。

こうした教育の在り方を考えるとき、社会との橋渡しを担う進路指導は、人間としての在り方生き方の指導と深くかかわらざるを得ません。将来の社会生活や職業生活に関する理解を深め、「人間としていかに生きるべきか」を自問し、自己を見つめ、自己の特性や能力を理解し、それをかけがえのない自己の個性としてとらえ、それを進んで社会に生かそうとする意欲や態度を持つことができるように指導・援助することに、高等学校の進路指導本来の意義があると言えます。

第3節 進路に関するアンケート調査から見る生徒の実態

今回実施のアンケート調査は46項目あり、小学校、中学校との共通が25項目、高等学校独自の「進路に関するアンケート」が21項目（記述回答3項目）ありました。ここでは、高等学校の研究主題にかかわる調査項目を中心に、本府の高校生の傾向を分析・考察しました。

1 アンケート調査結果について

生徒のアンケート調査数、2,214人の内訳は、次のとおりです。

	1年	男子 419人	女子 346人	計 765人
全日制 20校	2年	421人	307人	728人
	3年	374人	347人	721人
	全体	1,214人	1,000人	2,214人

アンケート結果の分析・考察は、次のように、12のテーマで行いました。

(1) 友人関係について	(2) ボランティア活動等の活動体験について	
(3) 自己理解について	(4) 自己表現力について	(5) 規範意識について
(6) 入学前の進路について	(7) 自分の将来について	
(8) 社会とのかかわりについて	(9) 職業について	(10) 職業選択について
(11) 進路学習について	(12) 第2・第4土曜の過ごし方について	

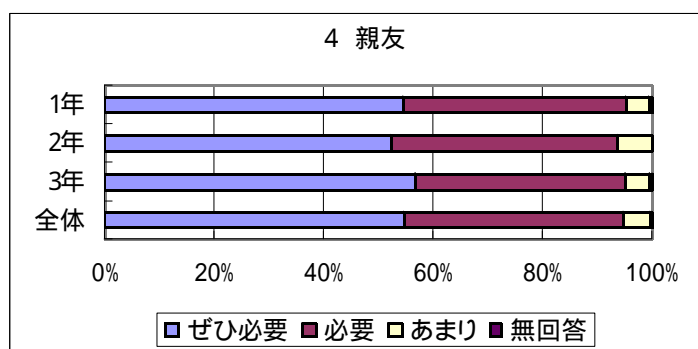
なお、表で男女別を、また、グラフでは学年別を示しました。

(1) 友人関係について

[4 親友は必要だと思いますか。]

- ア ぜひ必要だと思う
- イ 必要だと思う
- ウ あまり必要だとは思わない

	ア	イ	ウ	無回
男	52.6	41.7	5.2	0.5
女	57.3	37.9	4.7	0.1
計	54.7	40.0	5.0	0.3



< 分析・考察 >

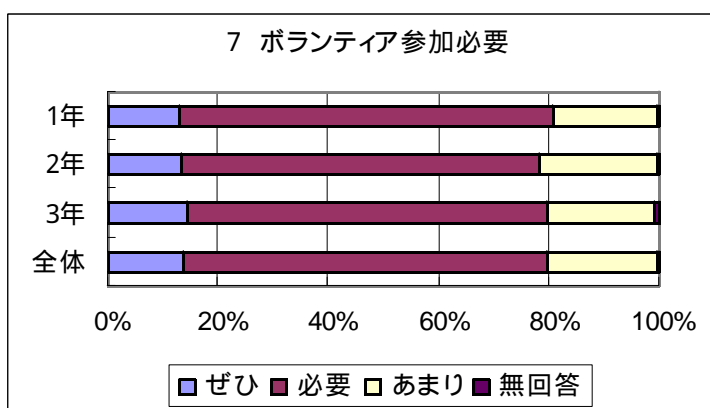
親友は「ぜひ必要、必要」と回答したのは、全体で94.7%（男子94.2%、女子95.2%）と高い数値を示しています。しかし、共通項目の「3 親友と呼べる友人はいますか」で、「いる」と回答した81.4%（男子78.5%、女子84.9%）との関連で見ると、必要との思いと実際との間には隔たりがあります。また、共通項目「3」では、男女間にやや差異（男子78.5%、女子84.9%）が見られました。

(2) ボランティア活動等の活動体験について

[7 ボランティア活動などに参加することは必要だと思いますか。]

- ア ぜひ必要だと思う
- イ 必要だと思う
- ウ あまり必要だとは思わない

	ア	イ	ウ	無
男	13.3	61.9	24.1	0.6
女	14.3	70.7	14.8	0.2
計	13.8	66.3	19.5	0.4



< 分析・考察 >

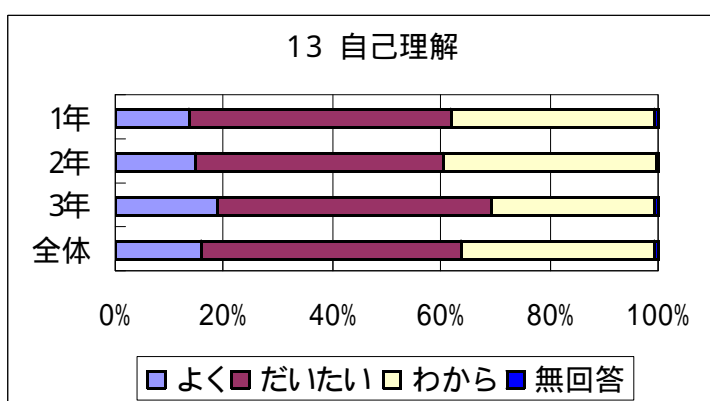
参加は「ぜひ必要、必要」と回答したのは、全体で80.1%（男子75.2%、女子85%）と高い数値を示しています。しかし、共通項目の「6 活動に参加していますか」で、「よく参加する、ときどき参加する」と回答したのは19.5%（男子20%、女子19%）、逆に「ほとんど参加したことがない、参加したことがない」と回答したのは80.3%となっています。また、共通項目の「8 ボランティア活動など、広く社会に貢献できることをどう思いますか」の回答を見ると、「とてもよいことだと思う、よいことだと思う」が82.7%となっています。このことから、ボランティア活動や社会貢献については、理解を示すとともに意義も感じてはいますが、実際の行動には結びついていない現実が見られます。生徒の抱く理想と現実には大きな隔たりがあります。

(3) 自己理解について

[13 自分自身の個性・特性などについて理解していますか。その中で好きなところはどこですか。]

- ア よく理解している
- イ だいたい理解している
- ウ 分からない

	ア	イ	ウ	無
男	18.0	41.7	39.7	0.7
女	12.3	55.8	30.8	0.5
計	15.7	48.1	35.7	0.6



< 分析・考察 >

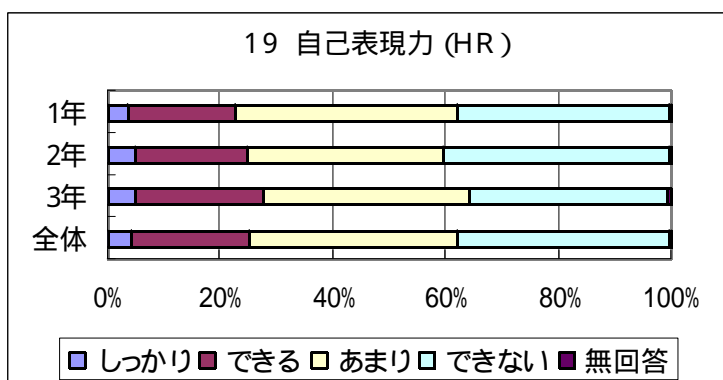
「よく理解している、だいたい理解している」と回答したのは、全体で63.8%（男子59.8%、女子68.7%）を示し、「分からない」との回答は、全体で35.7%（男子39.7%、女子30.8%）となっています。また、「その中で好きなところはどこですか」の設問に対する記述回答は、女子に多く、男子にはほとんど見られませんでした。「自己理解」は、人間としての在り方生き方にかかわる指導の基本となるものです。ここに、今後の進路指導における課題があります。

(4) 自己表現力について

[19 自分の意見を、ホームルームなどで発表することができますか。]

- ア しっかりできる
- イ できる
- ウ あまりできない
- エ できない

	ア	イ	ウ	エ	無
男	5.4	19.3	36.9	38.0	0.5
女	3.3	22.2	37.0	37.0	0.5
計	4.4	20.6	36.9	37.5	0.5



<分析・考察>

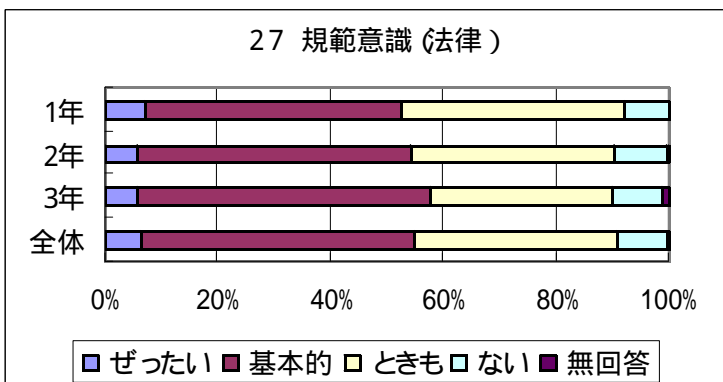
「しっかりできる、できる」と回答したのは、全体で25%にとどまり、共通項目の「11 自分の気持ちや意見を、家族や友人など親しい人に伝えることができますか」で、「しっかりできる、できる」と回答した75.6%との間には、かなりの差異が見られます。自己表現の場や相手によって見られるこのような傾向は、学校生活（ホームルーム等）での人間関係が小集団化している現状や、学校という小社会の場でさえ社会性が不足しているということを顕著に表していると言えます。

(5) 規範意識について

[27 法律についてどう思いますか。]

- ア 絶対守るもの
- イ 基本的に守るもの
- ウ 守るべきだが守れないときもあるもの
- エ 分からない

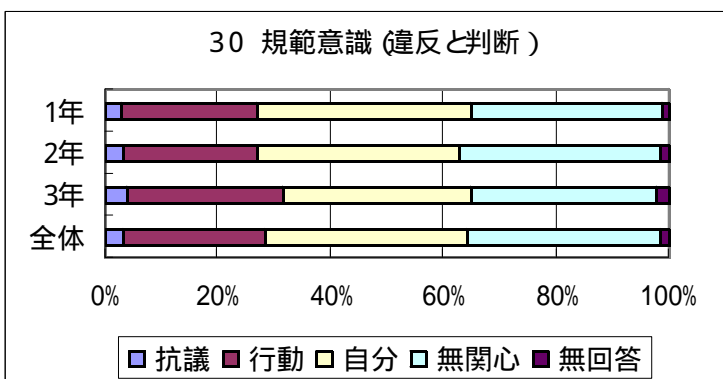
	ア	イ	ウ	エ	無
男	7.4	43.4	39.5	8.9	0.9
女	5.0	55.0	31.6	8.3	0.1
計	6.3	48.6	35.9	8.6	0.5



[30 上記問29「法律に反したり、ルールを守らない人を見たり、知った時どう感じますか。」のような場合、どうしますか。]

- ア 抗議や注意をする
- イ 身近なことなら何か行動する
- ウ 自分の気持ちの中で納めておく
- エ かかわらない

	ア	イ	ウ	エ	無
男	4.4	23.9	32.8	37.5	1.4
女	1.9	26.7	39.2	30.5	1.7
計	3.3	25.2	35.7	34.3	1.5



<分析・考察>

規範意識に関する項目として、「27 規範意識（法律）」、共通項目「18 規範意識（身近なルール）」、共通項目「19 正義感」、共通項目「20 正義感」、「30 規範意識（ルール違反と判断力）」があり、次のようにまとめることができます。

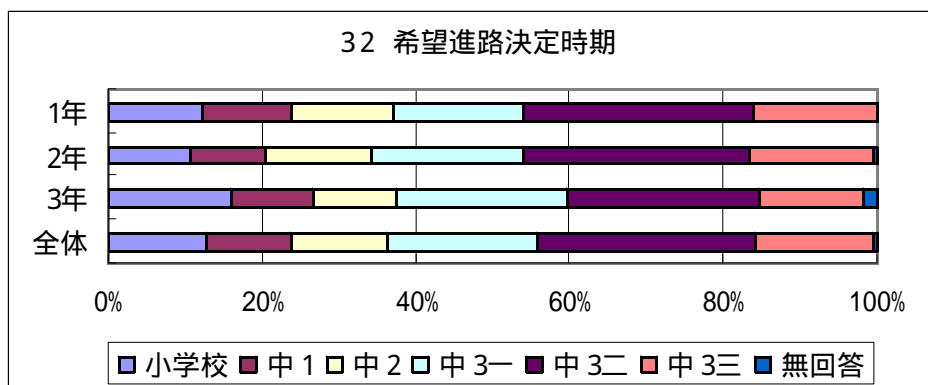
法律とは「基本的には守るものである（48.6%）が、守れないときもあるもの（35.9%）」であり、身近な社会や学校のルールは「守っている（78%）」。また、法律に反したり、ルールを守らない人を見たり、知った時は、「憤りを感じる（19.7%）、憤りを感じるがどうしようもないと思う（45.8%）、あまり憤りを感じない（33.2%）」と回答し、「どうしますか」に対しては、「抗議や注意をする（3.3%）」は、かなり低い数値となっています。「身近なことなら何か行動する（25.2%）」、「自分の気持ちの中で納めておく（35.7%）」、「かかわらない（34.3%）」と回答しています。ここには、現在の風潮とも言える「自分では分かっている、他人や友人に押しついたり、要求したりはしない」といった状況をうかがい知ることができます。

(6) 入学前の進路について

[32 今の進路（高校進学）を決めたのはいつ頃ですか。]

- ア 小学校の頃 イ 中学校1年の頃 ウ 中学校2年の頃
 エ 中学校3年1学期 オ 中学校3年2学期 カ 中学校3年3学期

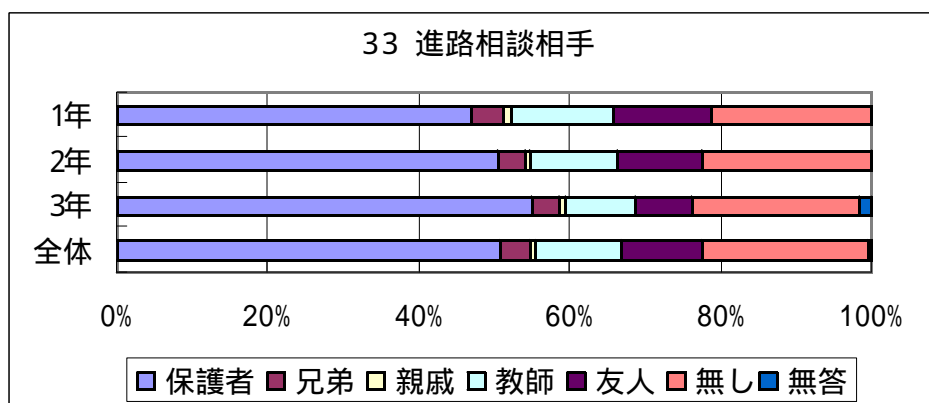
	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	無
男	11.1	10.2	12.0	19.8	28.7	17.6	0.4
女	15.1	11.2	13.2	19.4	27.8	12.5	0.8
計	12.9	10.7	12.6	19.7	28.3	15.3	0.6



[33 今の進路（高校進学）を最終的に決める時、主に相談した人は誰ですか。]

- ア 保護者 イ 兄弟姉妹 ウ 親戚の人 エ 教師 オ 友人 カ いない

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	無
男	44.4	3.1	1.3	13.2	9.6	27.3	1.0
女	59.0	4.7	0.2	9.3	11.4	15.4	0
計	50.6	3.9	0.9	11.5	10.5	22.0	0.5



< 分析・考察 >

高校進学を決めた時期は「中学校3年2学期(28.3%)」という回答が最も多く、続いて、「中学校3年1学期(19.7%)」となっています。しかし、「中学校3年3学期」という回答が15.3%というのは、やや気になる数値です。一方、3年生になる前に決めていた生徒は36.2%で、女子にやや多い傾向が見られます。

高校進学を最終的に決める時、主に相談した人としては、「保護者」という回答が半数の50.6%と最も多く、続いて、「教師(11.5%)」、「友人(10.5%)」となっています。

[34 中学校での進路に関する学習で、一番印象に残っているのはどのようなことですか。]

1年	<ul style="list-style-type: none"> ・職業調べ ・先生が自分の高校生活を語った ・先生の話 ・進学説明会 ・公立高校の設備や内容 ・家族や知人の職業について話を聞く ・職場訪問 ・公立受験者の話 ・将来の自分の姿について話す ・内申書について ・学校見学 ・夏休みの補習 ・模擬テスト受験 ・職業安定所の人の話
2年	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な人の職業を調べる ・作文 ・面談 ・学校見学 ・ビデオを観たこと ・職場体験学習 ・学校説明会 ・先輩の話を聞く ・進路ノート ・補習 ・面接練習
3年	<ul style="list-style-type: none"> ・面接練習 ・オープンキャンパス ・内申書について ・高校中退が増加していること ・二者、三者面談 ・先輩の話を聞く会 ・高校説明会 ・卒業生からの手紙 ・進学する学校を誇りに思うこと ・高校だけで人生は決まらないこと

< 分析・考察 >

各学年とも、印象に残った学習内容を素直に回答しています。職場体験(訪問)や先輩からの話(手紙)といった具体的な内容が、生徒にとって印象の強いものとなっています。

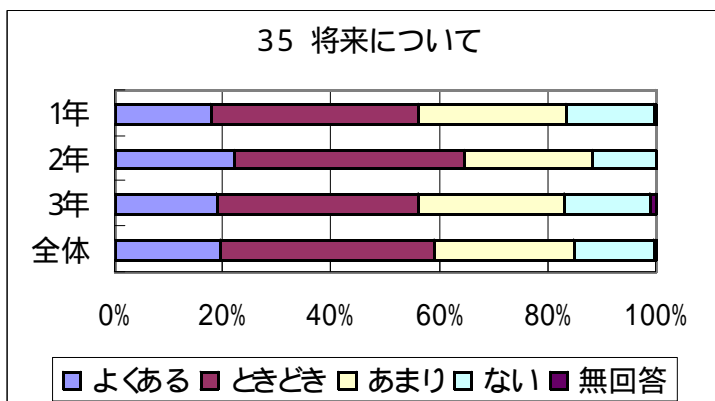
また、先生の話や三者面談、面接練習といった、教師との関係における内容もあげています。さらに、高校を知る機会としての、学校説明会や学校見学(体験入学)といったものへの印象も強くあると言えます。

(7) 自分の将来について

[35 自分の将来について、学校の授業・ホームルームを通して考えたことはありますか。]

- ア よくある
- イ ときどきある
- ウ あまりない
- エ ない

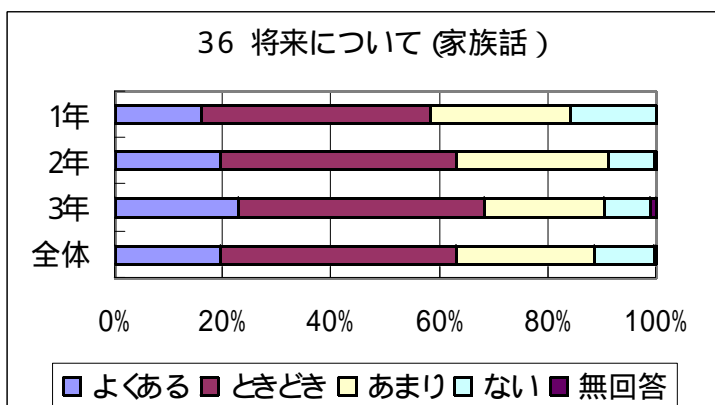
	ア	イ	ウ	エ	無
男	17.5	36.8	27.3	17.6	0.8
女	22.0	42.8	24.4	11.0	0
計	19.5	39.5	26.0	14.6	0.4



[36 自分の将来について、家族と話し合ったことはありますか。]

- ア よくある
- イ ときどきある
- ウ あまりない
- エ ない

	ア	イ	ウ	エ	無
男	15.7	40.4	29.5	13.7	0.7
女	23.9	47.9	20.4	7.9	0
計	19.5	43.8	25.4	11.1	0.4



<分析・考察>

自分の将来について、授業やHRを通して考えたことが「よくある、ときどきある」と回答したのは、全体で59%で、2年生と女子(64.8%)に高い数値が見られます。

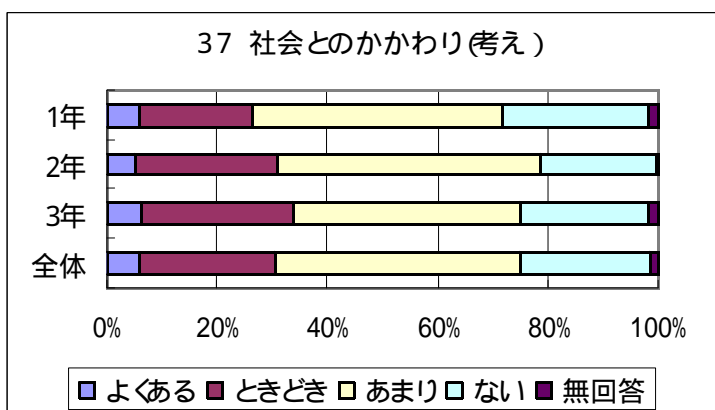
また、将来についての家族との話し合いは、学年が進行するにつれ多くなっています。しかし、「あまりない、ない」と回答した男子が、合計で43.2%を示しているのはやや気になるところです。

(8) 社会とのかかわりについて

[37自分と社会のかかわりについて、授業・ホームルームを通して考えたことはありますか。]

- ア よくある
- イ ときどきある
- ウ あまりない
- エ ない

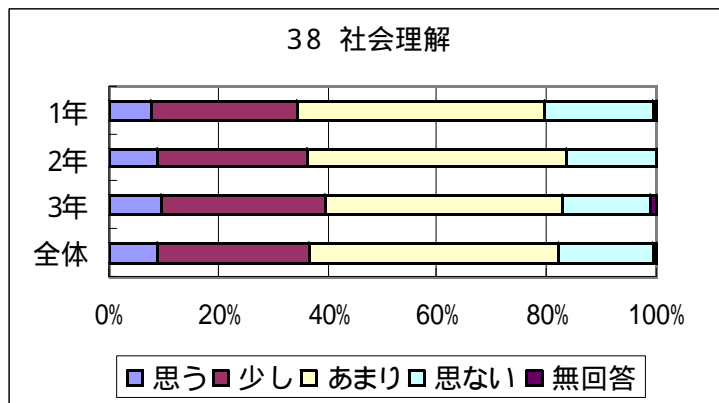
	ア	イ	ウ	エ	無
男	6.5	24.3	42.5	25.5	1.2
女	4.7	25.0	47.3	21.0	1.5
計	5.7	24.6	44.7	23.7	1.3



[38 高校生として、社会について十分理解できていると思いますか。]

- ア 思う
- イ 少し思う
- ウ あまり思わない
- エ 思わない

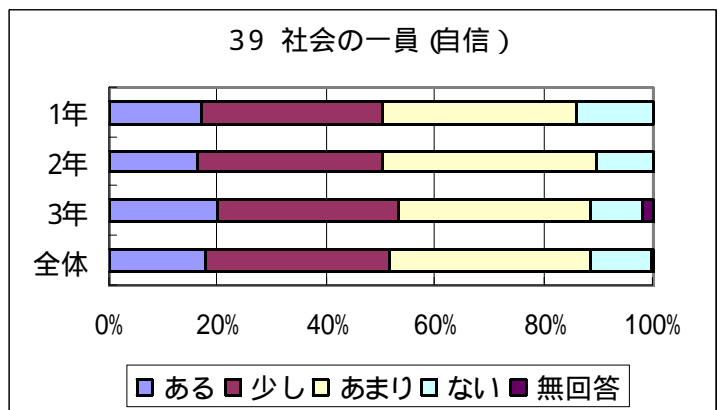
	ア	イ	ウ	エ	無
男	10.7	30.4	40.4	17.7	0.7
女	6.2	24.9	51.3	17.1	0.5
計	8.7	27.9	45.3	17.4	0.6



[39 社会の一員としてやっていく自信がありますか。]

- ア ある
- イ 少しある
- ウ あまりない
- エ ない

	ア	イ	ウ	エ	無
男	21.1	36.3	31.5	10.5	0.6
女	13.6	30.8	43.5	12.3	0
計	17.7	33.8	36.9	11.3	0.2



<分析・考察>

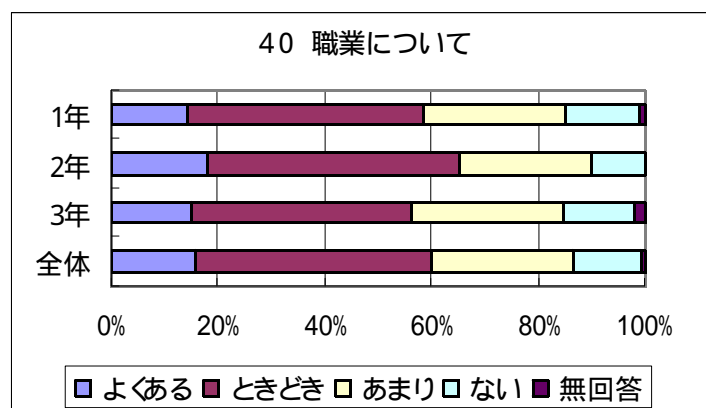
社会とのかかわりについて、授業やHRを通して考えたことが「あまりない、ない」と回答したのは、全体で68.4%(男子68%、女子68.3%)なっています。社会理解については、プラス傾向、マイナス傾向がともに約50%(半々)になっています。また、社会の一員としてやっていく自信は「あまりない」としたのは、36.9%で、女子(43.5%)に高い数値が見られます。

(9) 職業について

[40 職業について、授業・ホームルームを通して考えたことがありますか。]

- ア よくある
- イ ときどきある
- ウ あまりない
- エ ない

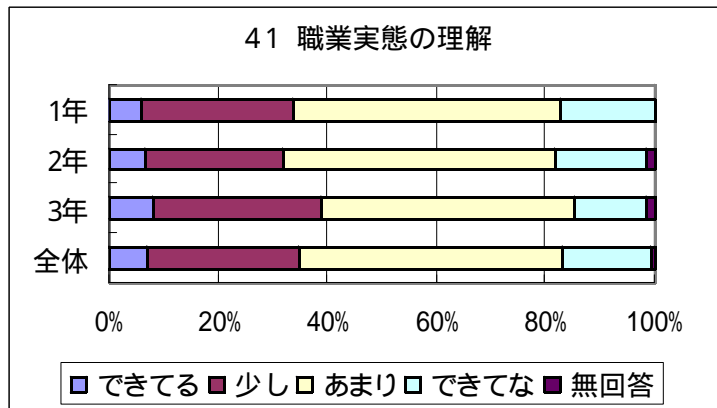
	ア	イ	ウ	エ	無
男	15.1	42.2	27.1	13.8	1.9
女	16.5	46.4	26.6	10.9	0
計	15.7	44.1	26.9	12.5	0.6



[41 様々な職業の実態について具体的に理解できていると思いますか。]

- ア できている
- イ 少しできている
- ウ あまりできていない
- エ できていない

	ア	イ	ウ	エ	無
男	0.9	28.5	46.5	15.5	0.5
女	4.1	27.2	50.9	16.3	1.5
計	6.8	27.9	48.5	15.9	0.9



<分析・考察>

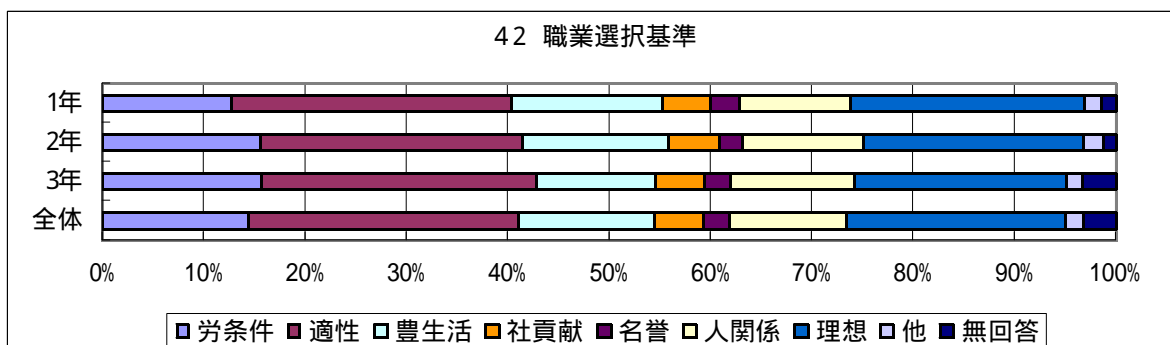
職業について、授業・ホームルームを通して考えたことは「よくある、ときどきある」と回答したのは、全体で59.8%（男子57.3%、女子62.9%）を示し、「分からない」との回答は、全体で39.4%（男子40.9%、女子37.5%）となっています。また、「様々な職業の実態について具体的に理解できていますか」について「あまりできていない、できていない」と回答したのは、全体で64.4%（男子62%、女子57.2%）となっています。職業について考えたことはあるが、実際には「具体的に理解ができていない」ことを示しています。

(10) 職業選択について

[42 今、職業を選ぶとしたら、どのようなことを基準に選びますか。]（複数回答可）

- ア 労働条件
- イ 自分の適性
- ウ 豊かな生活
- エ 社会への貢献
- オ 名誉や社会的地位
- カ 人間関係
- キ 理想の職業
- ク その他

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	無
男	36.1	62.3	37.1	11.6	8.9	28.6	55.1	5.8	5.6
女	38.2	75.1	31.7	13.1	3.9	30.9	55.9	2.8	1.6
計	37.0	68.1	34.7	12.3	6.6	29.6	55.5	4.5	8.3



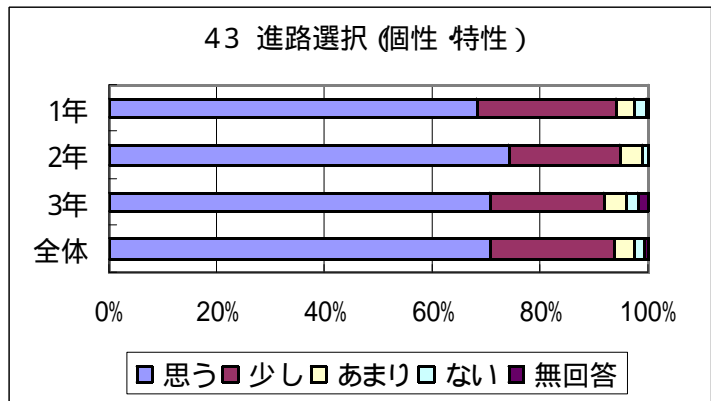
<分析・考察>

職業選択の基準として「自分の適性(68.1%)、（女子は75.1%）」、「理想の職業(55.5%)」を回答している数値が高くなっています。また、「自分の適性」や「労働条件」については、学年進行で高くなっています。

[43 進路を選択する際に、自分の個性・適性をよく理解しておくことが必要と思いますか。]

ア 思う イ 少し思う
ウ あまり思わない エ 思わない

	ア	イ	ウ	エ	無
男	66.3	25.0	5.3	2.4	1.0
女	76.5	20.0	2.0	1.1	0.5
計	70.9	22.8	3.8	1.8	0.8



<分析・考察>

「思う、少し思う」と回答したのは、全体で93.7% (男子91.3%、女子96.5%) となり、非常に高い数値を示しています。しかし、項目「13 自分自身の個性・特性などについて理解していますか」で、「よく理解している、だいたい理解している」の回答は、全体で63.8% (男子59.7%、女子68.1%) となっています。ここにも、思い(理想)と実際(現実)との間には、約30%というかなりの隔たりが見られます。

(11) 進路学習について

[44 高校での進路に関する学習で、一番印象に残っているのはどのようなことですか。]

1年	<ul style="list-style-type: none"> (普通科) ・適性検査 ・大学進学、大学卒業後のこと ・文系・理系の主な就職先 ・仕事の種類が多く分らなかった ・業者の「進路」のプリント・職種の多いこと ・文系・理系について ・2学期、いきなり大学の偏差値が配られたこと ・進路講演会の話 ・学習方法を教えてもらった ・フレッシュマンセミナー ・補習 ・1年の時から目標を持っていると合格率が高い ・外部講師の話 ・漫画家の道 ・就職の厳しさ ・アンケート調査 (専門学科) ・進学就職状況の話 ・いろいろな業種が載っている本を使った学習 ・教師のいろいろな話 ・職業について ・先生の生き方について学ぶ ・適性検査
2年	<ul style="list-style-type: none"> (普通科) ・適性検査 ・進路説明会 ・現役企業の人の説明 ・体験談 ・大企業の人事部長の面談の話 ・1日3時間の勉強が当たり前 ・個人面談 ・希望して行った看護体験 ・現実には厳しいという話 ・進路(学校)見学 ・進路先を本で調べた ・先生の話 (専門学科) ・会社見学 ・自分が何の職業に向いているかを調べたこと ・適性検査 ・就職のこと ・求人票を見たこと
3年	<ul style="list-style-type: none"> (普通科) ・大学について ・適性検査 ・卒業生からの勉強のアドバイス ・同じ年にも就職する人が結構いる ・進路講演会 ・社会人の講演会 ・志望校のレベルの高さを知って愕然としたこと ・進路(別)説明会 ・人に助けを求めることも大切だが、最後はやはり自分の力がものをいうということ ・二者面談 ・面接のビデオ ・オリエンテーション ・模擬面接 (専門学科) ・適性検査 ・面接練習 ・会社見学 ・履歴書を書く練習 ・進路別の説明会

[45 進路に関する学習について、今後どんなことをしてほしいですか。]

1年	<p>(普通科) ・実習(企業が無償で) ・それぞれの進路についての利点 ・職業の種類、内容 ・1年なのでしてほしい ・大学・学部紹介、職業紹介 ・将来の職業情報 ・勉強に関する具体的なアドバイス ・職業適性検査 ・どんなふうにしたら 職業につけるか ・大学決定方法、内容 ・社会見学 ・仕事をする上での苦労、志したきっかけ ・教師の話(人生を語る) ・社会人の話 ・自分の就きたい職業に必要なこと ・大学の授業体験 ・資格について ・専門学校について ・自分の成績と大学の関係 (専門学科) ・もっと多くの職業が見たい ・もっと力を入れてほしい ・全国の大学や専門学校の詳しい情報 ・どんな職業があるのか ・ビデオや資料を見たい</p>
2年	<p>(普通科) ・現代社会の状況 ・細かく進路分野別にやってほしい ・個人面談 ・いろいろ教えてほしい ・職業について ・大学について詳しく知りたい ・大学でできること学べることを体験談として聞きたい ・現役大学生の話 ・身を乗り出して聞きたくなるような話 ・適性検査、その後の選択の指示 ・学部・学科の詳しいプリントの配布 ・職業体験 ・大学の授業参観 ・職場見学 (働いている人の説明) ・センター入試について ・不安を減らす話 ・個人個人 にあった紹介 ・自分でレポート作成 ・専門学校の説明 ・性格検査 (専門学科) ・就職状況 ・相談にのってほしい ・先輩の例 ・会社訪問 ・もっと詳しく説明してほしい ・いろんな分野に分かれた学習 ・大学や専門学校のこと</p>
3年	<p>(普通科) ・大学卒業後の職業について ・大学、社会の実態を知りたい ・職場体験(一日体験就職) ・学部、学科と職業のつながり ・大学別の内容 ・先輩の例を紹介してほしい ・二者面談、説明会をもっと増やす ・センター試験のこと ・進路学習の回数をもっと増やす ・大学、職場見学 ・もっと早い時期からの入試説明会 ・もっと親身になってほしい ・職業人の話を聞く ・フリータのその後の事情 ・職業の実態 (専門学科) ・会社見学 ・先生からのアドバイス ・先輩の話</p>

<分析・考察>

高校での進路に関する学習について、一番印象に残っているものを、学年別に列挙しました。第2節2「LHR年間指導計画」にもありましたが、各学年における進路指導(学習)が一定、生徒に定着していることを顕著に示しています。

今後希望する進路に関する学習についても、生徒が記述回答したものを、生の声として列挙しました。生徒たちは既習の進路学習を踏まえ、もっと知りたいことなど、進路学習に興味・関心・意欲を示しています。こういった生徒の状況(要求)を受け入れた、在り方生き方にかかわる進路指導、つまり、体験的活動(学習)を通して学ぶ、自己理解、自己の適性・能力、進路情報、職業理解、課題解決等が必要と考えられます。

(12) 第2・第4土曜の過ごし方について

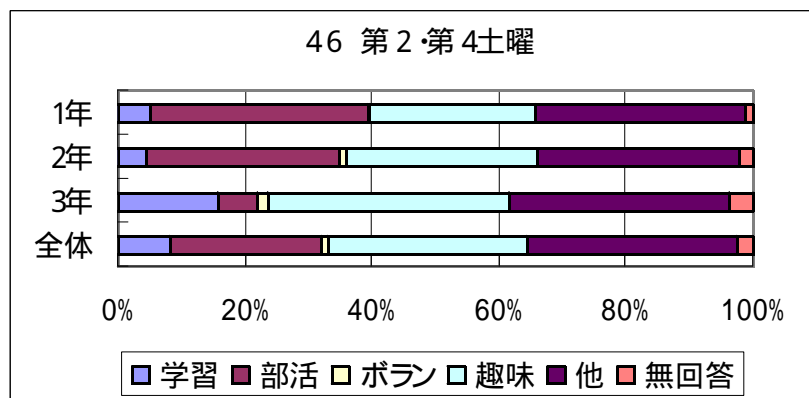
[46 第2・第4土曜はどのように過ごしていますか。]

ア 学習 イ 部活動
ウ ボランティア活動など
エ 趣味・習い事 オ その他

	ア	イ	ウ	エ	オ	無
男	8.4	25.5	1.3	31.9	30.1	2.7
女	8.2	21.8	0.6	30.8	36.5	2.1
計	8.3	23.8	1.0	31.4	33.0	2.4

<分析・考察>

最も多い回答は「その他(33%)」(女子が高い数値)で、「アルバイトや寝ている」「何もしていない」等を記述回答しています。次に多い回答は「趣味・習い事(31.%)」で、3年生に高い数値が見られます。



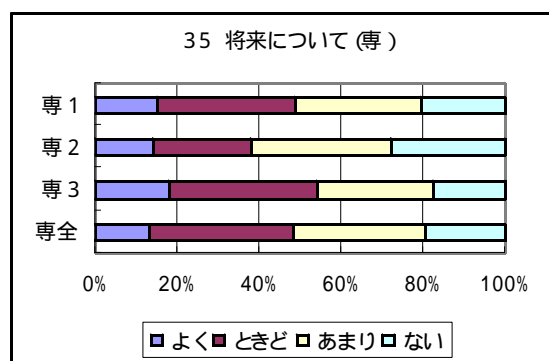
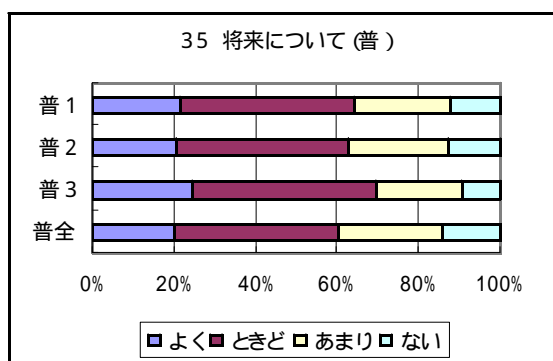
学年別による特徴的な傾向としては、1・2年に比べて3年の「学習が増え、部活動が減少」という点があげられます。

学校週5日制完全実施に向けての対応、つまり、余暇時間の活用(過ごし方)等、生涯学習につながる在り方生き方についての学習及び指導が課題として考えられます。

2 アンケート調査結果に見られる、普通科・専門学科の特徴的傾向

(1) 普通科と専門学科で、10%程度の差異が見られたもの

アンケート項目 35[自分の将来について、学校の授業・ホームルームを通して考えたことはありますか。]の回答として、下記グラフのように10%程度の差異が見られます。



また、項目36[自分の将来について、家族と話し合ったことはありますか。]の回答にも同じ結果が見られました。

このことから「自分の将来について、学校の授業・HRを通してよく考え、家族と話し合ったこともある」という点において差異があると言えます。

(2) 普通科と専門学科で、5%程度の差異が見られたもの

5%程度の差異が見られたものとしては、項目7「ボランティア活動などへの参加」・項目13「自分の適性・特性の理解」・項目27「法律について」・項目32「進路決定時期」・項目37「自分と社会とのかかわり」・項目42・43「進路選択・職業選択基準」・項目46「第2・4土曜の過ごし方」といったものがありました。

<まとめと課題>

・プラス傾向の回答が9割以上を示したものとして、(1)友人関係についてと(11)職業選択についての二つがありました。「親友は必要だ」と思い、「進路を選択するには、自分の個性・適性をよく理解しておくことが必要」と思っている、現代高校生の特徴(理想)がよく表れています。

・プラス傾向の回答が4割以下を示したものとして、(5)自己表現力について、(6)規範意識について、(8)社会とのかかわりについて、(9)職業についてがありました。自分の意見を、ホームルームなどで発表できない、自己表現力の低い生徒が多くいるとともに、法律に反したり、ルールを守らない人を見たり、知った時の言動として「自分の気持ちの中で納めておく、かわらない」という判断を示す生徒が学年進行で多くなっています。

また、自分と社会とのかかわりについて、授業・ホームルームを通して考えたことが少なく、高校生として、社会について十分理解できていない現状も見られます。更に、様々な職業の実態について具体的に理解できていないこともあげられます。

・ボランティア活動等の活動体験については、必要性や参加の気持ちは十分持っているが、実際に行動に結びついていない状況があり、体験の機会や場を計画的・継続的に設定する必要があります。

・ホームルームにおいては、自己表現力を養う活動や社会とのかかわり、そして、自分の将来や社会について考えたり、話し合ったりする活動等を計画的に進めることが必要と考えます。

・生徒は「自分自身の個性・特性で好きなところ」の記述回答を、次のようにしています。

<男子>	責任感が強い	好きなことについてはほとんど知ろうとする	協調性がある
	冷静で落ち着いている	前向きに考える	明るい
	明るくはっきり明瞭	人との接し方がよい	
<女子>	明るい	楽観的	趣味がはっきりしている
	人見知りをしない	やさしい	面倒見がいい
	思った言える	平等に接することができる	感受性が豊か
	積極的である	自分自身の行動に責任をもっている	思ったことが言える
	あきらめずにやりとげる	何か夢中になっているときの自分	協調性がある
	素直に喜べる	人の気持ちをよく考える	人の話を聞ける
		自分の意見、考えをしっかりと持っている	誠実である

第4節 在り方生き方にかかわる資質・能力を育成する進路指導の在り方

1 高等学校における在り方生き方の指導としての進路指導

(1) 人格形成にかかわる進路指導

高等学校における在り方生き方の指導については、教科や特別活動等すべての教育活動を通して行われるものです。高等学校学習指導要領においては「生徒が自らの在り方生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行うこと」（第1章総則）として示されています。その進路指導の意義を踏まえ、学校教育全体を通じて円滑かつ適切に行われようとするとき、進路指導は、高等学校における在り方生き方にかかわる指導を、総合的にかつ具体的に集約したものであると言えるのではないかと考えます。そして、その指導を通して、「生きる力」の中核をなす「豊かな人間性」を中心として、基本的な生活習慣や自我の確立を基盤とした、道徳性をはじめとする望ましい人間としての基礎的・基本的な諸能力や、変化の激しい現代社会の中で主体的に適応して生き抜く力、さらに社会人としての望ましい勤労観・職業観などについても十分に身に付くものと考えます。

また、今回の教育課程審議会答申においては、「各学校段階における役割の基本について」の中で、「高等学校においては、義務教育の基礎の上に立って、自らの在り方生き方を考えさせ、将来の進路を選択する能力や態度を育成するとともに、社会についての認識を深め、興味関心等に応じ将来の学問や職業の専門分野の基礎・基本の学習によって個性の一層の伸長と自立を図ることが求められている。」として高等学校教育の今日的な役割が明確に示されています。中でも高等学校での段階を一人一人の個性の伸長と自己の確立の上に立った自立を図る段階として、生徒の多様な個性を積極的に認め、育てることを求めています。そこで、在り方生き方の指導としての進路指導を、今日的教育課題と照らし合わせながら具体的な進路にかかわる学習として考えていくならば、以下のような視点があると考えられます。

(2) 進路指導の今日的視点

ア 高校生としてのアイデンティティの形成と個性の伸長

(ア) 発達段階としての青年期と自我の形成

高等学校という段階を、確かな自我の形成を基盤とした個々の資質・能力の獲得段階、自己認識の深化と自立を図る段階とするならば、個人の特性、すなわち個性がそれぞれの生徒の中で具体的に形をもちはじめるとともに、それを客観的に自己認識しようとする段階であると考えられます。また、今回のアンケートの結果にもあるように、その個性（自分自身）をいとおしむ自尊感情が働いたり、その自分らしさを主体的に生かし、よりよく生活しようとする積極的な向上心を発揮したり、他人から認められることによって生まれる自己存在感を強く求める感情が働いたりする時期であるとも考えられます。

在り方生き方の指導は、従来からも主に特別活動を中心に、学年毎に指導目標を設定し、年間指導計画を作成するなどして実践されてきています。また学習指導要領においては、特別活動の指導計画の作成と内容の取扱いに関して、ホームルーム活動に配当する授業時数の3分の2以上を充てることが示されています。

一方、一人一人の個性の伸長については、各自の資質・能力の多様さや形成段階の違い等を

考慮しながら、学校教育全体を通して、確かな目標・計画に基づき、あらゆる教育活動を通してその育成を図ることが必要です。ただ、現実には個々の生徒への具体的な指導・支援の在り方や具体的な方法、さらに評価等については、必ずしも明確になっているとは言えない状況もあります。すなわち生徒個人の在り方生き方の指導におけるしっかりとした役割や責任分担が必ずしも明確でなく、その諸能力や資質の獲得、達成の状況が継続的に把握され、適切に指導・支援されているとは言えないのが現状ではないかと考えられます。

(イ) 生徒一人一人の個性を尊重した教育と個性の伸長

個性を尊重した教育を進める今日の学校教育にあっては、高等学校における教育の目標として、一人一人の豊かな個性の伸長を図り、実現していくことが最も重要となってきました。また、在り方生き方の指導においても、現状からさらに一步踏み込んだ個に応じた指導の在り方を考えることが必要です。

このことは、個々の生徒の個性の伸長の過程にも積極的にかわりをもつ指導を実践することと言えます。学年ごとの発達段階を踏まえた指導計画を基本とするとともに、一人一人の資質・能力を顕現化させながら、柔軟で伸びやかな伸長を図り、確かな個性として実現することを目標とする、個に応じた進路指導や進路学習の在り方を徹底する時期にあるとも言えます。

ウ 指導観の転換と在り方生き方の指導の工夫

今日、学校においては、学習する主体は生徒であり、教師は援助・支援の立場を基本に指導するものという指導観に立ち、教育が進められています。その指導観に立って、個性の伸長・実現を目指すならば、従来よりも、より具体的に個性の形成の過程にかかわりをもつことが重要になってきていると考えられます。

在り方生き方の指導において、それぞれの学習の過程での教師の役割を十分吟味し、明確にすることが大切です。従来ややもすると、生き方在り方は、生徒一人一人の中で、生活全般を通して、自然に、主体的・総合的に育つものであるという認識から、見守る、助言するという、見方によっては、消極的な構えで指導してきたとも言えます。今後は学習の過程に積極的にかかわっていくという視点から、観察・見守る、提案・提示する、指摘・助言する、確認・評価するなど、それぞれの段階や機会・場面に応じて、具体的でしかも個に応じた柔軟な援助・支援の在り方を明確にした学習指導計画を立案することが大切です。そのような工夫改善があっではじめて、真に個性の伸長と実現が可能となり、在り方生き方の指導を基本とした豊かな進路指導・進路学習が成り立つものと考えられます。

一方、生活体験の不足や人間関係の希薄さ、社会体験の絶対的な不足等、様々な生徒を取り巻く教育課題が提示されていますが、それらを解決していくため、どのように家庭、地域社会と連携を図っていくのか、指導観の転換とあわせてその具体的な方策についても工夫改善していくことが重要になってきます。

エ 学習の機会・場の拡充と教育課程等の工夫

以上のような進路指導に関する現状認識に立ち、今日までの具体的な取組とその成果を踏まえ、今後さらに在り方生き方の指導としての進路指導・進路学習の工夫改善を考える必要があります。前述の(1)、(2)の2点の他、「総合的な学習の時間」の趣旨を生かした指導の工夫や

在り方生き方にかかわる多様な資料の収集と提供、インターンシップをはじめとする学社連携の充実、家庭・地域社会・学校の役割の明確化、特色ある学校づくりと柔軟な教育課程の編成などの視点からも十分考慮していく必要があります。

具体的には、在り方生き方の指導において、多様な体験的活動をより一層充実し、教育目標や学習内容、カリキュラム等に柔軟に組み込んでいくという、進路学習の機会と場を積極的に拡大しようとする発想の転換が必要となってきます。すなわち体験的な学習の機会と場としての、校時内と校時外、校内と校外を柔軟に取り込みながら、様々な体験的活動を幅広く取り入れた、計画的な進路学習を展開していくということです。

例えば、今までは学校教育が直接関与することがなかった校外での様々な生徒の活動とどのようにリンクし、学校の進路学習の体系に取り込むかを積極的に考えようとする柔軟な発想も必要になってきます。また、校内での校時外のさまざまな活動を、どのように学習として位置付けすることができるか、現行の学習指導要領の範囲の中でどう工夫改善し、実施することが可能であるかなどについて、各校で十分に検討することも必要となってきます。

(3) 体験的な活動と進路学習の具体的展開

ア 体験的な活動の有効性

第15期中央教育審議会をはじめとする諸答申において、今日の児童生徒に見られる多くの教育課題が示され、その根底には、生活体験や自然体験、社会体験等実体験が絶対的に不足している現状があることが指摘されています。本研究のアンケート結果から見た本府における状況も全国的な傾向と同様であり、いくつかの課題が明らかになってきています。

進路学習においては、従来から、進路を考えるための多くの基礎知識と、生徒の主体的な進路選択に必要な客観的な資料や情報を提供しながら指導してきています。しかし、今日、生徒における実体験の絶対的な不足は、それらの知識や情報を、自分自身のものとして整理し、活用することを困難にしてきています。それらの多くは、単なる紙の上の知識やデータであり、生きてはたらく智恵としては身に付けられず、実践的な力としての「生きる力」を育成することとはなっていないと考えられます。

高等学校においても、小学校・中学校と同様にあらゆる教育場面において体験的な活動の有効性が認識され、教科教育においても様々な授業改善の取組がなされていることは周知のことです。また、近年ボランティア活動への理解が深まり、様々な活動への生徒の主体的な参加が見られ、各校でも、学校としての取組が盛んとなり、多くの成果が報告されています。

進路指導においても、職場や学校見学が盛んに取り組まれ、生徒の適切な進路選択の生きた資料となる貴重な体験となっています。「為すことによって学ぶ」という体験的な学習の基本に立ち、生徒自身が様々な実体験を通して、職業や進路、そして人間としての在り方生き方について、多くのことを実感し、感得する機会をもつことは大変有効です。

一方、個人では整理がつかないほどの進路に関する情報が氾濫し、それが生徒自身の的確な進路選択を阻害している現実的な側面も見受けられます。これらの改善を考えたとき、体験的な活動を基にした系統的な進路学習の充実は最も有効な方法であると言えます。

イ 活動から学習への展開

体験的な活動を適切に取り入れた進路学習として、在り方生き方にかかわる指導をより一層

充実するよう工夫改善するためには、次のような視点が考えられます。

まず第一に、体験的な活動そのものの継続性を重視し、日常化を図ることです。

様々な体験的活動を、いかに無理なく、日常化して継続的に取り組むことができるかを工夫し、それぞれの活動を単発的な活動で終わらせないように計画することが大切です。

第二には、体験的な活動から体験的な学習へと体系化を図ることです。

体験そのものは生徒の気付きを促し、視野を広げる最も有効な方法です。ただ「なすことによって学ぶ」とは、一つ一つの貴重な体験によって多くの新たな発見があることだけを指しているのではなく、活動と同時に、それらの活動を通して得られた貴重な内容を、自分自身のものとして獲得するための学習の過程が必要であることも意味しています。すなわち、なすことによって様々な気付きや発見があり、その感覚的で主観的なものを自分の中に受け入れるための学習過程があってはじめて、新たな経験や知識として定着します。その知識を基に、さらに新たな活動へと結びついていきます。なすことによって学び、学ぶことによってなす、こうした循環こそが大切です。

進路学習においても体験的な活動とともに、その前後に適切な学習の過程が必要です。その活動と学習の繰り返しの中で、自分自身の人間としての在り方生き方、また、一人の社会人として生きる上での職業観、さらに、具体的に進路を選択する際の基本的な基準といったものが、生徒一人一人の中で広がり、深まりながら確かなものとして形成されていくものと考えます。

体験的な活動を取り入れながら、日常化し、体系化することによって、高校生活を通した進路学習を企画することが大変重要となります。そして、その学習においては、教師は生徒が主体的に自らの進路について考え、判断する過程にかかわりをもって指導すること、さらにその基盤となる自らの在り方生き方を形成・獲得していく過程にも、適切にかかわりをもって指導することがますます重要になってきています。

ウ 諸答申等から見た進路学習の考え方

今回示された教育課程審議会答申における、教育課程の基準の改善のねらいの一つである、「特色ある学校づくり」の視点から見ると、高等学校における教員の意識の転換を図り、教科学習中心から、在り方生き方を育てる柔軟な姿勢を反映した特色ある教育課程へと転換することが大切です。さらに、開かれた学校としての在り方を考えるとき、限られた年間授業時数の中での工夫とあわせて、すべてを学校教育からだけ発想するのではなく、校外での活動をうまく取り入れ、学校教育と有機的に関連づけ、学校における学習へと活用を図るよう柔軟に考え、視野を広げていくことが必要です。

教育課程審議会答申の大きな改善事項である「総合的な学習の時間」の趣旨は、まさにその体験的な学習の在り方を具体的に示唆するものであると考えられます。また、平成11年3月に告示された学習指導要領においては、各校の特色ある教育課程の編成に資するよう、地域や学校、生徒の実態、学科の特色に応じて「学校設定の教科・科目」を設けることや、学校設定教科に関する科目として「産業社会と人間」を設けることができるとしています。「この科目の目標、内容、単位数等を定めるに当たっては、産業社会における自己の在り方生き方について考えさせ、社会に積極的に寄与し、生涯にわたって学習に取り組む意欲や態度を養うとともに、生徒の主体的な各教科・科目の選択に資するよう就業体験等の体験的な学習や調査・研究などを通して以下のような事項について指導することに配慮する」としています。

社会生活や職業生活に必要な基本的な能力や態度及び望ましい勤労観、職業観の育成
我国の産業の発展とそれがもたらした社会の変化についての考察
自己の将来に生き方や進路についての考察及び各教科・科目の履修計画の作成

また、理科教育及び産業教育審議会答申においては、現在大学で取り組まれている「インターンシップ（就業体験）」を高等学校においても積極的に取り組むことが提言されています。さらに、政府においても文部省が中心となり、「高校生のインターンシップ推進のための関係省庁連絡会議」をもち、その具体的な運営や産学の連携などについて調整を図り、具体的な実施に向けて取り組みはじめています。

2 進路学習の具体的な取組の考案

高等学校における進路指導を、人間としての在り方生き方にかかわる指導の集約した内容としてとらえるとともに、進路指導の中核をなす進路学習について、様々な角度からその基本的な在り方を整理・検討してきましたが、在り方生き方の指導につながる進路学習を、現行の学習指導要領の範囲において考えると、まだまだ具体的な工夫改善の余地があると言えます。

次にその3つの具体的な取組事例について、これまでの内容を踏まえてさらに検討していくこととします。

(1) 多様な学習の機会（校内）

ア 社会人講師の活用

今後の進路指導の改善・充実を図っていく上で、従来から実施されていたものをより有効に活用していくことが大切です。

例えば、これまでは進路学習の時間に、講師を招いての講演会を実施していましたが、その講師には、地域や企業等の外部の方や、教員、卒業生等の学校関係者がなってきました。このような講師を「人材バンク」化しておくことが大切だと考えられます。

(ア) 社会人講師活用の有効性

社会人講師を活用した講演会等において、重要な意味をもっているのは「人を教材にする」ということです。幅広い経験と優れた知識・技能をもつ社会人から話を聞くことは、学校の教育内容を多様なものにするだけでなく、生徒の社会性や勤労観・職業観を触発することにもつながります。

社会人講師の活用については、以下のような具体的効果が考えられます。

学校・教師では語れない、社会における講師の専門性を超える内容が得られることです。生徒たちは「本物にふれる喜び」を味わうことになります。

学校外の人々自体が「教材」になることです。その人の生き方そのものが、生徒たちの心に響いてくることです。

地域や企業等の学校外の人々に学校を理解してもらう機会になるということです。自校の生徒たちの「生きる姿」を見てもらい、異なる視野からの提言を得る機会になります。

(イ) 社会人講師活用の方法

アンケートの結果にも見られるように、学年や学科に関係なく生徒の進路意識には、個々の

考え方により個人差があります。校内において、男女、学年を超えて、興味ある者が自由に参加できる機会を放課後に設けておくことが大切です。次の（例）のように月に2回程度、例えば第一週と第三週の土曜日に「土曜日講座」と設定し、年間を通して多彩な人材を活用して、多様な興味・関心のある講座を開催します。

（例）土曜日講座

回数	講師	テーマ
1	水産業に従事する人	地域の産業
2	看護婦（看護師）	生きがい
3	自動車整備士	今の仕事について
4	保母	学生時代
5	大学生（卒業生）	私の信条
6	警察官	失敗談
7	販売員（卒業生）	贈る言葉
8	学校図書館司書	読書の楽しさ
9	医師（学校医）	身体健康と心の健康
10	銀行員	身近な経済

講師・テーマは一例であり、各校の特色を出すことが可能です。

こうした講座で、学んだことを「進路ノート」にまとめておくことは、生徒自身が自己の在り方生き方を考える際の、また、担任にとって生徒支援の資料にもなります。さらに、講師を人材バンク化することで、インターンシップ（就業体験）との接点ともなると考えます。

（ウ）インターネットの活用

・ インターネットの環境整備

高度情報通信社会になり、コンピュータ活用の日常化が図られています。インターネット上には、世界の様々な組織や学校等のコンピュータが接続されており、活用できる情報が数多く存在しています。そこから情報を収集し、発信したり、互いに交流することは、生徒の情報活用能力の育成につながっていくこととなります。この能力は、これからの社会に生きるための基本的な資質の一つと言えます。インターネットを参考書や資料集を使って学習するように、必要を感じたときに、気軽に活用できる工夫を図ることが最も大切です。平成9年度から3か年計画で全府立学校をインターネットに接続する事業も始まり、環境も整いつつあります。生徒が校時外の昼休みや放課後に自由にインターネットを利用するためには、コンピュータを進路室や学校図書館等自由に出入りできる場所に設置する必要があると考えます。

「将来、どんな仕事に就きたいか」「どのような生活を送りたいか」など、人間としての在り方生き方にかかわる問題は、すべての生徒が自己の課題として考えなければならないことです。自らの将来像を描くに当たり、興味のあるものや身近な場所から検索していき、誤りや不必要な内容を含んだ情報から、正しい情報や本当に必要な情報を取捨選択しながら、自らの進路希望の実現につなげることとなります。インターネットの活用によって、教師との面談等で得る量をはるかに超える情報が、瞬時に広がっていきます。

（I）インターネット活用の方法

・ 就職情報の収集

企業のホームページが多数存在し、会社の概要や業務内容などを手に入れることが可能となり、疑問点、質問などがあれば、電子メールでのやりとりも可能です。求人情報などは大学生向けが中心ですが、今後は高校生向けのものも増えてくると考えられます。

就職情報の代表的サイトを、次に紹介します。

- | | |
|--------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ・ハローワークkyoto | http://www.ha4.seikyoku.ne.jp/home/hellowork |
| ・大阪商工会議所 | http://www.osaka.cci.or.jp/ |
| ・シム・キャリア | http://job.rent.or.jp/SC/N/KOJIN/simindex.html/ |

大阪商工会議所をリンクすると、近畿一円の商工会議所につながります。

・進学情報の収集

各大学・短大・専門学校の数多くもホームページを開き、学部・学科から教授、入試情報や周辺の地図、クラブ活動、そして、就職先にいたるまで、インターネットを通して手に入れることが可能です。また、現役大学生の生の声もあり、大学生活の実態を知ることができます。学ぶ内容が多様化し複雑化する中で、しっかりとした学部・学科を選択する必要があります。その際には、疑問や悩みを電子メール等を利用し、解決することもできます。

進学情報の代表的サイトを、次に紹介します。

- | | |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| ・京都府総合教育センター | http://www1.kyoto-be.ne.jp/ |
| ・大阪教育大学 | http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/ |
| ・リクルート進学ネット | http://www.recruit.co.jp/shingaku/ |

メールアドレスを用いることで、情報の大量な蓄積も可能となります。また、教師宛にメールを送ることで、時間にかかわらず、生徒の進路相談にのることや生徒から得る情報で教師の情報量も増えることとなります。

(2) 多様な学習の機会（校外）

ア 地域や産業界とのパートナーシップ確立のもとでの就業体験

今後の進路指導の改善・充実を図っていく上で、地域や産業界とのパートナーシップ（双方向の協力関係）をいかに確立していくかが重要な要件の一つとなります。先に示された理科教育及び産業教育審議会答申（平成10年7月23日）は、インターンシップ（就業体験）の教育上の意義について

第1に、職業の現場における実際的な知識や技術・技能に触れることが可能になるとともに、学校における学習と職業との関係についての生徒の理解を促進し、学習意欲を喚起するなど、専門高校における教育内容・方法の改善・充実に資することができる。

第2に、生徒が自己の職業適性や将来設計について考える機会となり、主体的な職業選択の能力や高い職業意識の育成が促進される。

第3に、インターンシップの場は、生徒が教師や保護者以外の大人と接する貴重な機会であり、異世代とのコミュニケーション能力の向上も期待できる。

と述べています。また、「高校生のインターンシップ推進のための関係省庁連絡会議」では、

高等学校の生徒の在学中における就業体験について、専門学科では生徒全員、普通科・総合学科においてもできる限り多くの生徒が体験することを目標として推進を図ることとしています。

これらは体験的な学習の機会を望む生徒のニーズにも合致した内容であり、就業体験のもつ意味は大きいと言えます。

(ア) インターンシップ（就業体験）の実施形態

インターンシップの実施形態は、大きく分けて、学校が主体となって行うものと、企業等が主体となって行うものとの二つが考えられます。

学校が主体となって行う場合には、各教科における「課題研究」や各科目の実習、あるいは特別活動の一環として取り組むことが考えられます。また、地域の実態に応じ、各設置者や学校の判断により、インターンシップを取り入れた学習を行うための科目を設けたり、平成15年度から学年進行で導入される「総合的な学習の時間」においても取り扱うことが考えられます。

一方、企業が主体となって行われる場合には、企業で用意された就業体験のためのプログラムに生徒が参加する形態も考えられます。

(イ) インターンシップ（就業体験）実施上の留意点

学校と企業等の綿密な連携

インターンシップの実施に当たっては、学校と企業が適切な連携をとり、実施していく必要があります。学校教育における成果や課題を共通理解し、生徒の勤労観・職業観の育成や人間としての在り方生き方を考える貴重な体験の場としていくことが、学社連携を図る意味において重要です。しかし、実際には、受け入れる企業を見つけることは容易ではなく、校内でつくりあげた人材バンクを活用したり、PTA、産業教育振興会、あるいは地域の商工会議所等との連携も必要となります。

インターンシップを活用した系統的・計画的な進路学習

インターンシップを単発的な行事として取り扱うのではなく、事前・事後の指導はもちろんのこと3年間を見通した進路学習の一環として捉えることが重要です。また、人間の在り方生き方にかかわる人間教育としてとらえることも重要です。そのためには、「進路ノート」を活用して支援していくことも重要です。

インターンシップと就職・採用活動の関係

インターンシップは、就職・採用活動と直接結びつけられるものではないと言えます。学校はその企画、実施に当たっては、受け入れ企業等関係者にその趣旨やねらいなどについて、十分な理解を求めるとともに、早期の採用活動が行われないような手だてをしておくことが必要です。

インターンシップに当たっての安全の確保や事故等の防止

体験中の生徒の事故等の防止については、学校、企業等の双方において十分に留意することが必要ですが、体験現場における安全の確保に関しては、企業等において責任を持った対応が望まれます。また、生徒が企業等に損害を与える場合も含め、万一に備え、学校と企業との間で責任の所在と役割分担を明確にしておくとともに、保険への加入等の配慮が必要です。

インターンシップと報酬との関係

インターンシップは、教育活動の一部として捉え、アルバイトとは明確に区別することが必

要です。したがって、企業から報酬を得ることは望ましくないと考えます。

イ ボランティア教育の推進

アンケート結果にも見られるように、多くの生徒が体験的な学習であるボランティア活動の意義は十分理解しているが、その機会がないと回答しています。中央教育審議会の答申等は、児童生徒の体験不足や学校教育における体験的な学習の不足を指摘するとともに、ボランティア教育の必要性を強調しています。

(ア) ボランティア教育推進の意義

ボランティア活動には、自己開発並びに相互学習の機能が色濃くあります。同時に、課題に気づき課題に挑戦するという側面もあります。つまり、ボランティア活動を通しての学びが生徒の視野や認識を広げ、深めることとなり、行動を豊かなものにしていきます。そして、継続性が高まり、かつ責任感も生じてきます。また、他者に必要とされることで喜びや生きがいを覚え、それを糧にして豊かな人間へと自立していきます。このように、ボランティア教育の推進は生徒にとって重要な意味をもっています。

(イ) ボランティア教育の進め方

ボランティア教育の進め方については、第一歩をどのように踏み出すかが大きなハードルになります。その第一歩を踏み出すためには、まず、ボランティア活動への関心と意欲を喚起することが必要です。その理由として、ボランティア活動は、あくまでも生徒の自発性・自主性を尊重しなければならないということがあるからです。そして、教師の支援としては、これまで学校で進めてきたボランティア活動の検証、改善があり、さらに、地域の社会福祉協議会や各種団体、全国、都道府県のボランティアセンターなど学校外の関係団体と連携を図りながら、生徒の興味・関心に応じた色々な活動の機会を提供することが大切と考えます。例えば、学校外のボランティア関係団体と連携を図り、ボランティアバンクを設置することです。生徒自身が自分の興味・関心に応じたボランティア活動を選び、ボランティアバンクに登録し、自主的にボランティアに参加していけるよう支援していくことです。

(ウ) 進路指導の視点

ボランティア教育の意義・役割とは、学校での教科等の学習と生徒がボランティア活動を通して学んだ体験とをリンクさせていくことと考えます。したがって、ボランティア活動が一過性の学習活動で終わることがないように、生徒自身にボランティアについて考えさせることによって、体験の意味づけをしていくことが、在り方生き方を考えさせる上で大切だと言えます。

計画的・継続的な進路指導の中に、ボランティア活動をしっかりと位置づけることにより、その活動体験を通して得たさまざまな成果を、進路決定の一つの材料に加えていくことができると考えます。

(3) 進路ノートの工夫と活用

ア 進路ノートの概要

進路学習における進路ノートについては、現在も多くの学校で活用されています。その形態も、市販のものや学校が独自に工夫して作成されたものなどいくつかの種類があります。しかし、現状では前節までに検討してきた進路学習のねらいや視点を十分に踏まえた活用は、なかなか困難なようにも考えられます。

そこで、改めて人間としての在り方生き方の指導を基本とした進路学習において、進路ノートの在り方について整理すると、次のような概要となります。

まず第1に、ノートは高校生活を通して、原則的には生徒一人一人が管理することになります。進路学習の一環として活用する上から、当然全員に最低限の守るべき基本事項やルールは示すこととします。年間を通して、いくつかの大きなテーマについて学習するという流れの中では、その記述内容は多様なものとなり、自らの在り方生き方や進路に関するあらゆることを自由に記録した個人ファイルの形式となります。

すなわち、一つのテーマからスタートしますが、その後は、いつ、何について、どのように学習するか、すべて生徒の主体性にかかっています。このようになり自由度の高い形式をとって進めることから、ある生徒は一つのことにとこだわりをもってどんどんと深く調査・研究し、自分の進むべき道を的確に見きわめることも可能となります。

また、別の生徒においては、あらゆる職業に従事する人々から、その生きざまを聴き取り調査し、自分なりの生き方についていろいろ迷いながら考え続けることもできると考えられます。生徒の主体的な学習や活動が基本としてある限り、教師はそれを支援することとします。

以上の概要を整理すると、以下のようなノート活用の視点があります。

(7) 自己認識の場

ある時点における自分の考えや興味・関心に即した資料収集や自分なりの判断によるまとめは、自分自身のその時点におけるありのままの姿を客観的に認識するよい機会となります。また、自分の軌跡を振り返りその変遷をたどることは、自己認識を深め、今後の自分のあるべき方向を確信することとなります。

(1) 主体的な学習の場

学習活動の主体が自分自身であることから、まず自分で何かを始めなければスタートできません。しかし、記録や資料のファイルがどんどん増えるにしたがって、自分の興味・関心も広がり、自分が計画し実行する学習そのものの楽しみも湧いてくることでしょう。このように主体的な学習を積極的に進めることは、教科の学習態度にも望ましい影響力をもつだけでなく、いわゆる問題解決能力の育成にもつながるものと考えます。

(9) 情報活用能力を養う場

自分が関心をもった内容に関してどん欲に情報を収集することは、その次にそれらの中から自分に必要なものを選択・判断し、処理・活用することとなり、情報活用能力の育成の絶好の機会となります。

(I) 個性の伸長と実現を図る場

自らの課題を解決するため、積極的に主体的な学習に取り組むことは、自己認識を深めると

ともに、自らの資質・能力をよりよく伸ばしようとする態度を養います。自尊感情をもち、かけがえのない自分自身の可能性を最大限伸ばそうと努力することは、高校生の人格形成の上からも大切にしなければならない態度です。一人一人が豊かに個性を開花させることができこそ、他人を尊重する態度も生まれてくるものです。ノートの取扱いを基本的に生徒に委ねることは自己意識や自負心を育て、自分の進路に自ら責任をもつ態度を育てることになります。

(4) 主体的な学習を支援する場

一方、教師にとっては、今までの指導観を柔軟に転換することも必要です。まず、一人一人が教師の想定した内容や方法とは全く違った自由なテーマをもって記録・ファイルすることが多くあると考えられます。教師はこの進路学習においては、常に一人一人を大切にしながら指導することとなり、まさに個に応じた指導を徹底しなければなりません。しかし、あくまでも学習する主体は生徒であり、教師はそれを支援することを基本とします。生徒の主体性を尊重しながらその学習過程に、側面からかかわって支援するということは、言葉では簡単ですが実践においては大変難しいものであると言えます。

換言すれば、生徒は教師が計画した学習内容の枠の中で活動するのではなく、生徒自らの主体的な判断で自由に学習を進めていくことになり、教師はその生徒の積極性や学習意欲を信頼し、学習内容の多くを委ねることになります。そして、すべての生徒が主体的に学習を進められるよう、学習の仕方を学ばせることが大きな仕事となるのです。

イ ノート活用の視点と指導上の留意点

(7) 学習を構成する柱の設定

生徒の積極的な学習を促すためにも、年度毎におおよその学習の流れや方向を定めるための学習主題や柱を設定せねばなりません。その際特に留意すべきこととして、そのテーマや柱が十分に幅をもったものであることです。一人一人の生徒がそれぞれ異なった学習を進められるよう、その内容に膨らみや広がりをもたせることが必要です。

(1) 資料収集等を通じた社会とのかかわり

多くの生きた情報を収集することがこの学習の基本です。その方法は様々であり、決して学校の中だけに限定すべきものではないと言えます。また、その対象は地域社会や事業所、大学、さらには一般社会人まで、多岐にわたることが考えられます。

直接、学校や教師が連携をとることが困難な場合も多く、資料の収集や調査など生徒の社会とのかかわり方について、生徒の主体性や意欲を妨げぬよう配慮して指導・助言することも必要です。

(9) 体験的な活動との連携とノート学習

進路学習に関連した体験的な活動には、学校が設定したものから社会教育団体をはじめとする各種団体の主催するもの、さらには企業や個人の主催するものまで多様な形態と内容が考えられます。また生徒自らが調査し、収集する活動もあります。それらが大変貴重な進路学習の機会であることとともに、そこで得た様々な思いや気づきを、自らの進路や在り方生き方を考える資料とするために、このノートの活用は欠かせないものです。心で感じただけでなく、そ

れらを的確に自分の言葉で記録し保存することは、体験が生きてはたらく経験へと変化することでもあります。しかし、これだけではノートに多くの効果は期待できないと考えます。必ず体験的な活動を適切に取り込んだノート活用の計画が望まれます。

(I) 発表の場の設定

このノートが生徒の自己管理を基本とし、自由に主体的に学習を進めることが最も大切です。ただし、これらの貴重な学習の成果を、なんらかの形で発表することができれば、その生徒の自己認識を進め、互いの人間としての在り方生き方や人生観、職業観等について共感的理解が進み、さらに自らの考えが深まっていくこととなります。様々な機会と形態が考えられ、生徒や学校、地域社会の状況に応じて工夫することが可能となります。

(オ) 生徒との信頼関係と支援

進路学習としてそれぞれの過程において支援・指導するためには、ノートの内容を通して生徒と教師が深い信頼関係で結ばれていることが前提となります。

ノートをどこにどのように管理したらよいのか、教師がどのようにしてそのノートを見る機会を設定できるだろうかなど、このノートの趣旨からして取扱いが非常にデリケートになってくることが想像できます。生徒との信頼関係があってこそこの学習形態は成果を挙げることができると言えます。

ウ ノートの様式

このノートを活用した進路学習のねらいから、ノートの様式はファイル形式が最も望ましいと考えられます。日記帳の様式ではあまりにも漠然としており、単なるメモも感想やまとめの内容も区別がつきにくく煩雑になりがちです。ファイル形式にすることで、生徒自身が自分なりのまとまりをつけ、整理することができます。

また、いくつかのファイルで一つのテーマをまとめるなどして、写真をはじめとする様々な資料なども自由に挟み込むことができ、取捨選択しながらそれらの記録や資料が再構成されます。さらに、その生徒の意図やねらいが明確になったまとまりのある内容となって生きることになります。ある期間にそのファイルを見直し、自分の軌跡を確認する上でもファイル形式は大変有効な様式です。

具体的には、B4サイズの30シート程度のクリアホルダー等が適当であると考えられます。